

公益財団法人日本文化藝術財団 「創造する伝統賞」過去の受賞者

<音楽>

2009年度 受賞

スズキ トシヤ

鈴木 俊哉

【肩書き】リコーダー奏者

【分野】リコーダー演奏・現代音楽

アムステルダム音楽院卒業。リコーダーの可能性と技術の開拓に取り組む。B.ファーニホウ、細川俊夫、S.シャリーノ、湯浅譲二といった作曲家たちと共同作業をおこない、彼等の作品を初演する。ウィーンモデルン、チューリッヒ新音楽の日、ガウデアムス、ダルムシュタット、ISCM、秋吉台、パリの秋、武生、ロワイヨモン、ヨーロッパ・アジア国際現代音楽祭、クランクシュプレーン、トンヨン、ルーマニア国際現代音楽祭等の音楽祭にソリストとして参加。'02年のダルムシュタット夏期講習会講師。クラニーニッシュュタイナー賞、中島健蔵音楽賞、創造する伝統賞等を受賞。

【選評】リコーダーという楽器に伝統のコンセプトを加えて、個性的な奏法で日本の伝統楽器との共演に積極的に取り組み、あらたな境地を拓いている。これからの国際的な活躍が大いに期待される。

2010年度 受賞

イツソ ユキヒロ

一噌 幸弘

【肩書き】能楽師 / 一噌流笛方

【分野】音楽

安土桃山時代より続く能楽笛方の名手として能楽古典の世界で活躍する以外にも篠笛、自ら考案した田楽笛、リコーダー、角笛など西洋各種の笛を演奏、作家活動を行う。数々のホール公演、交響楽団との共演における自作曲やクラシック等の演奏だけではなく、歌手・舞踏家への楽曲のアレンジ、自作曲の提供などその活動は縦横無尽。日本文化藝術財団第2回「創造する伝統賞」受賞。重要無形文化財総合指定保持者。国立能楽堂講師。

【選評】能楽の一噌流笛方として、数々の大曲を演奏している若手実力者であり、氏の演奏の卓越した技能は国内外で評価されている。また、現代作品における能管演奏など、伝統の創造的な活動にも積極的に関わり、現代における伝統の発信にも大きく貢献するとともに、リコーダー、田楽笛など能楽以外の管楽器による作品創作、他分野との積極的なコラボレーションなど、活動の幅は極めて広く、氏の自由自在で多面的な活動は注目すべきと考えられる。伝統を基に創造する力のこれからの、大いに期待できる演奏家である。

2011年度 受賞

カンノ ヨシヒロ

菅野 由弘

【肩書き】作曲家 / 早稲田大学 教授

【分野】作曲・音楽

東京藝術大学大学院作曲科修了。1979年「弦楽四重奏曲」がモナコ・フランス・ピエール作曲賞。94年・電子音楽「時の鏡I 風の地平」IMC推薦作品、2002年「アウラ」でイタリア放送協会賞、2012年、創造する伝統賞。作品は国立劇場委嘱の雅楽、声明、古代楽器の「西行一光の道」(春秋社刊)、NHK交響楽団委嘱のオーケストラ「崩壊の神話」、声明「十牛図」、太陽の記憶「卓弥呼」、NHK大河ドラマ「炎立つ」、「にっぽんの芸能」テーマ音楽など。

【選評】菅野氏は、「すべての音は音楽になり得る」という観点で、素材を限定しない作曲活動を行なっているが、西洋音楽のみならず日本の伝統音楽に極めて精通した数少ない作曲家である。加えて、伝統音楽の本質を現代に活かすための独自の方法論をすでに獲得し、国際的な視点で創作活動を展開している。特に、声明、雅楽、仏教楽器を素材とした現代作品の創作力は抜きん出ており、過去にも、伝統音楽に関わる現代作品を数多く手がけ評価されているが、不思議なことに受賞歴がほとんどない。したがって、本賞のコンセプトである「創造する伝統」、埋もれた才能ある芸術家を顕彰する点で高く評価し、「創造する伝統賞」に選考する次第である。

2012年度 受賞

キネヤ カツシロウ

杵屋 勝四郎

【肩書き】長唄唄方 / 財団法人長唄杵勝会理事

【分 野】長唄

1959年杵屋和四蔵の長男として生まれる。1974年より人間国宝 東音宮田哲男に師事。1997年文化庁芸術祭新人賞受賞、アテネオリンピックシンクロナイズドスイミング日本チーム音楽制作協力など古典にとどまらず多方面で活躍。2014年文化庁芸術祭音楽部門大賞受賞ほか多数受賞。

【選評】杵屋勝四郎氏は、4歳から長唄の稽古を始め、東京芸術大学在学中に名取となり、伝統を学びながらも、邦楽を若い世代にアピールすることを目的として、コマーシャル、ミュージカル、三味線ロックバンドなど様々な音楽活動を積み重ねてきた。同時に唄方として天性の美声に磨きをかけ、歌舞伎や日本舞踊の演奏者として頭角をあらわしてきた。そして杵屋勝四郎の名を六代目として襲名以降、華のある演奏家と目され、その期待に応え、加えて作曲にも才を発揮し、委嘱曲も多く舞台人からの信頼を集めている。近年では子どもたちや教師のための普及活動も積極的に行っている。今後、ますます、芸芸を伸ばし、後の世に残る創作活動をめざすことを願って、「創造する伝統賞」に選考する次第である。

2013年度 受賞

アオキ ショウジ

青木 彰時

【肩書き】琴古流尺八演奏家

【分 野】音楽

1965年生まれ。1974年より人間国宝・父二代青木鈴慕に師事。1992年文化庁芸術インターシップ生。1995年第1回リサイタルを開催、現在まで6回開催。尺八の製管、作曲活動にも力を注いでいる。

【選評】青木彰時氏は、1800年代に創始された琴古流尺八の伝統を受け継ぐ演奏家である。6歳より父・青木鈴慕氏に尺八を師事し、1995年から始めたリサイタルは5回を数える。また、著名な箏曲家の助演としても多くの舞台に立ち、ソウル、ニューヨーク、モスクワ、シドニーにおける招聘公演及び国際尺八フェスティバルに参加するなど国際的な活動も顕著である。

演奏活動に加えて、尺八製作技術の習得にも積極的で、文化庁芸術インターンシップ生として尺八の調律制作を学び、さらに10年間、大阪にて著名な整管師のもとで製管技術を習得した。この体験を踏まえて、2014年からは自身で調律した尺八で演奏活動を行うことを計画している。このように、尺八という楽器の全体像を意識しながら、演奏と楽器製作という両面を重視して活動を行ってきた点は高く評価できる。

氏の演奏・教育活動としては、琴古流尺八協会常任理事として古典の伝統を受け継ぐ活動、東京芸術大学邦楽科非常勤講師として若手を育成する活動、多くの舞台公演において古典曲の魅力伝える活動、伝統に基づいた新たな作品の創作活動、など多岐にわたる。これらの点で、青木氏は「創造する伝統」という本賞にふさわしい人材であると評価した。

2014年度 受賞

カワセ ロシュウ

川瀬 露秋

【肩書き】地歌箏曲胡弓演奏家

【分 野】邦楽

久留米市出身。1974年九州系地歌箏曲の三原幽香に師事。1982年生田流箏曲白秋会家元川瀬白秋の内弟子となり、箏、三絃、胡弓、歌舞伎音楽を学ぶ。1987年小林露秋の名を許される。2009年川瀬白秋の養女となり川瀬露秋と名乗る。三曲の活動と共に歌舞伎黒御簾音楽、歌舞伎俳優の指導も行う。現在九州系地歌を藤井泰和に師事。2016年第20回日本伝統文化振興財団賞受賞。日本三曲協会理事、生田流協会理事、生田流箏曲白秋会代表。

【選評】福岡県の一般家庭に生まれながら、7歳より地歌箏曲を15歳で上京。生田流箏曲、白秋会家元、川瀬白秋の元で内弟子修行を重ねた。その結果、天分が認められ露秋の名を許され、川瀬家の養女にも迎えられた。

故白秋が、歌舞伎墨御簾音楽の演奏と歌舞伎俳優に演奏指導していた業績を身近で学び、公演用に短期間での俳優特訓の仕上げや、自らの演奏にも卓抜した能力を発揮。また、「源氏物語」「石川五右衛門」など新作の箏手付など作曲の才も開花。歌舞伎という華やかな舞台の裏方的存在ながら着実な活躍を評価し、哀切感ある胡弓や、雅びな箏、また九州系地歌の演奏者としても、なお一層の芸芸向上を期待し、この賞を贈り顕彰することとした。

2017年度 受賞

ワカジシカイ

若獅子会

【肩書き】 邦楽囃子方

【分 野】 邦楽囃子

同世代の邦楽囃子方が流派を超えて集まり、2006年に結成。日頃日本舞踊や長唄、清元などの三味線音楽で打楽器や笛を担当する邦楽囃子方が集まり、切磋琢磨し、お互いを高め合い、古典である邦楽囃子を学び次代に伝統を伝えることを使命としながらも、次の時代に向けて新しい表現をしていきたい。そして素晴らしい文化を少しでも多くの方に感じて頂きたい。そんな思いを持って結成しました。

【選評】 若獅子会は、メンバー全員が高い演奏技量を持ち、伝統の維持継承の活動に真摯に向き合いながら、規制の枠組みの中にとどめず、現代に息づく芸術として、新たな発展・創造の活動をしている。その活動は、雰囲気だけ伝統を借りたエンターテインメントと一線を画している。彼らは日本舞踊の囃子方として、また廃絶した地域の囃子の復元、大河ドラマなどの演奏場面の指導や出演など、個々に多面的な活動をしている。歌舞伎も日本舞踊も、囃子方なくては成立しないほど、囃子は重要であるが、常に裏方であることが多い。しかし、若獅子会の演奏の華やかさは、邦楽囃子が身近でない若い聴衆も魅きつけ、今後の邦楽界の発展に寄与するであろうと考える。（茂手木潔子）

2018年度 受賞

ヤスノ タロウ

安野 太郎

【肩書き】 作曲家

【分 野】 作曲／メディア・アート

79年東京生まれ。ブラジルと日本のハーフ。2002年東京音楽大学作曲科卒業。2004年情報科学芸術大学院大学（IAMAS）修了。現代音楽、電子音楽、等の創作を経て、近年はテクノロジーを軸に音楽のあり方を根底から考え直す試みを数多く発表している。代表作に自作自動演奏機械の為の音楽「ゾンビ音楽」シリーズや「大霊廟」シリーズ等があり、国内外で活動を展開している。2017年ワルシャワの音楽フェスティバルRadio Azjaでソロコンサートを開催した。2019年第58回ヴェネチア・ビエンナーレ 国際美術展日本館代表作家の一人。

【選評】 安野太郎の活動は、従来の楽音の価値観、演奏の在り方を悉く覆す挑戦的な試みであり、音楽芸術の立場から社会が抱く課題を照射し、新しい想像力と感性の展開を促す。「ゾンビ」は、ロボット（機械）のメタファーで、「ゾンビ音楽」とは「様々な形態のからくりの伝統が現代のデジタル技術によって再発明されたもの」である。身体性とテクノロジーとの新たな関わりへの追求を手法とするが、作品においてテクノロジーに奉仕する「演奏者」が踏み続ける「ふいこ」の響きの上に不規則的に重なる管楽器の音や、多くの微分音程、非楽音的な音色の集合は、視覚的な印象に反して「始原の音」へと聴く者を導き、その音響は、日本音楽の伝統の響きや音の集合の姿を思い起こさせる。まさに「創造する伝統賞」に相応しい活動である。（茂手木潔子）

2019年度 受賞

アオキリョウコ

青木 涼子

【肩書き】 能声楽家

【分 野】 能、現代音楽

世界の主要な現代音楽の作曲家と共に、能の声楽である「謡」を素材にした新しい楽曲を生み出し、国内外でオーケストラとの共演、オペラ出演を行っている。ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団、フィレンツェ五月音楽祭管弦楽団、アンサンブル・アンテルコンタンポランなどトップオーケストラと共演。パリの秋芸術祭、ベルリン・ムジークフェスト、バルトック・フェスティバルなどの音楽祭への参加や、コンサートヘボウ、ベルリン・フィルハーモニー、ケルン・フィルハーモニーなどの主要なホールに出演するなど、世界的な活躍をしている。東京藝術大学音楽研究科修士課程修了（能楽観世流シテ方専攻）。ロンドン大学博士課程修了。平成27年度文化庁文化交流使。

【選評】 能面が持っている造形的な美しさ、その造形から生み出される幽玄な表情は誰もが認めるものだ。その能面が持つ力（テクノロジー）を使わずに、「謡」と呼ばれる声楽だけを使い表現する青木涼子さんの活動は非常に特徴的である。能の伝統的な側面を受け継ぎつつ、それだけに留まらずに世界中の現代音楽の作品・作曲家・演奏家、また演劇とコラボレーションするその姿は賞賛に値する。

私たちは伝統的な表現が他の表現と出会い・共鳴し・そして“新しい表現（価値）”が生まれる場に立ち会えることに興奮を感じる。（原田大三郎）

2020年度 受賞

ホンジョウ ヒデジロウ

本條 秀慈郎

【肩書き】三味線演奏家、桐朋学園芸術短期大学非常勤講師

【分野】三味線

本條秀太郎に古典・現代の三味線音楽を師事。その演奏は“深い感動を呼び起こす”と演出家蜷川幸雄が絶賛。作曲家一柳慧から“本條秀慈郎の出現によって三味線が国際的な楽器として位置づけられるようになった”と評された。新たなレパートリーを創造し伝統となるべく国内外の作曲家への委嘱活動と世界各地のオーケストラ・アンサンブルやインスタレーション・ダンスなど他分野との融合も果敢に行っている。2020年パンデミック中、坂本龍一とネット配信での即興演奏や、藤倉大 三味線協奏曲を大野和士指揮都響にて日本初演、サントリーホールにて高橋悠治の三味線協奏曲「鳥も使いか」の演奏など時代と向き合い現在（いま）の表現をみつめる。

【選評】国内外の作曲家に自ら新作を委嘱し、各国でのソロ公演活動を果敢に展開。その卓越した演奏技術と作品解釈の明晰さで、これまで現代音楽の表舞台に登場してこなかった三味線という邦楽器の存在を世界に知らしめ、国内外の作曲家に大きな刺激を与えている。氏の出現によって、三味線を起用した斬新な楽曲が今後ますます創作され、音楽界全体に活力を与えることは想像に易い。氏は、伝統の先にある現代の力を求め、前衛こそ“伝統の光”だと確信し、三味線音楽の縦横無尽、臨機応変を具現化させるために、まさに“創造する伝統”は大きなメソッドだと言う。三味線という繊細で難解な楽器が紡ぎ出す音の魅力と可能性は、この若き才能によって未来にどれほど豊かに花開いて行くのか。氏の更なる研鑽と挑戦に期待したい。（花光潤子）

2023年度 受賞

クロサワ ユミ

黒澤 有美

【肩書き】箏曲演奏家・作曲家

【分野】音楽

3歳より十三絃箏を黒澤和雄、千賀子に、15歳より二十絃箏を吉村七重師に師事
箏曲生田流正派邦楽会 大師範

1998 慶應義塾大学総合政策学部 国際関係論学科卒業。在学中、コンピュータミュージック研究室に所属

2002 東京を拠点に活動展開後、伝統音楽継承者として現代における創造探求のため拠点をニューヨークに移し、カーネギーホール、ケネディセンター、リンカーンセンター他多数コンサート、ヨーロッパ、南米諸国、サウジアラビア、アジアなどでコンサート。ヒューストンバレエや演劇、スミソニアン美術館や米国立美術館の特別プロジェクトの作曲も担当

2021- コロンビア大学 音楽学部 パフォーマンスプログラム箏曲クラス講師

【選評】箏は、学校教育の中では「和」の文化として日本情緒と結びつけた学びが多い。しかし、黒澤氏の演奏活動と創造活動は、この情緒と結びつきがちな「箏」を、「楽器」として位置付け、箏音楽の「間」「音色」「沈黙」などに着目し、ニューヨークの活動拠点から日本の伝統音楽と文化を国際発信する活動である。黒澤氏は3歳から始めた十三絃箏、その後の二十絃箏の浪奏だけでなく、慶応大学ではコンピュータミュージックの権威で音楽学者の岩竹徹研究室で学び、多様な視点で箏音楽に向き合う姿勢を育んだ。近年の創作では、あえて無機的な音に着目して、静と動のコントラストを表現し、特に、箏音楽が「音色」を重視してきた歴史にも着目し、演劇、舞踊、文学など、広い視点から箏音楽の発信と可能性を広げる活動を行っている。今後のさらなる国際的な活動が期待される。（茂手木潔子）

2024年度 受賞

ナオユキマナベガガクアンサンブル

【肩書き】 雅楽演奏団体

Naoyuki MANABE GAGAKU Ensemble

【分野】 雅楽

雅楽演奏家の真鍋尚之の呼びかけにより、東京藝術大学・國學院大学・天理大学で雅楽を学んだ優秀な若手演奏家を集め、千年以上の歴史を持つ日本の伝統音楽である雅楽を世界に伝え、理解を図る事を目的に2020年9月結成。宮内庁式部職楽部・歴代首席楽長から雅楽全般に及ぶ指導を受けながら共演することで伝統の研鑽を重ね、コロナ禍の野外での演奏を通して空間を演出する演奏を展開。「伝統」と「前衛」という全く相対する両者を双方向から深く掘り下げ、別々の流れであった活動を一元化する試みを続けている。

【選評】 雅楽演奏家の真鍋尚之主宰の雅楽アンサンブルで、世界に雅楽の伝統を発信すべく2020年設立された。宮内庁式部職楽部元首席楽長、豊英秋との弟子として長年古典を学び研鑽を積んだ真鍋は、雅楽の伝統的な奏法「退吹」に着目し、その考えを応用した「退舞」、笛や箏の「木霊吹」など新たな様式を作り出し、伝統に基づいた新しい雅楽の可能性を鮮烈に提示した。真鍋はこの活動を、従来のように外部作曲家に委嘱した作品を演奏するのではなく、雅楽の内側から「伝統」と「前衛」という別々の活動を一元化する試みだと述べる。「西洋的視点の前衛作品ではなく、雅楽の伝統の延長線上に位置づける」作品の創造活動を行う当アンサンブルが、「創造する伝統」の活動であることは間違いないであろう。（茂手木潔子）

2025年度 受賞

ヤマベタイシ

【肩書き】 太鼓演奏家・作曲家・演出家

山部 泰嗣

1988年 岡山県倉敷市生まれ。3歳から太鼓に親しみ、6歳で倉敷天領太鼓のメンバーとして舞台に立つ。2004年「東京国際和太鼓コンテスト 大太鼓部門」にて史上最年少で最優秀賞を獲得。「50年に一度の逸材」と注目され、独特のリズム感と抜群に早いバチ捌きを特徴とし、あらゆるリズムを自由自在に和太鼓で表現する。プロ奏者として海外にも活動の場を広げる一方、舞台演出・作曲など新たな和太鼓の可能性を追求し、他ジャンルとの共演も積極的に行っている。

【選評】 選考過程では山部氏の表現について、各委員の専門的見地から白熱した議論が展開された。音楽の専門ではない池内がこの選評を書くことになる程、氏の国際的にも訴求するであろう表現の率直さと発展性のもつコントラストの鮮やかさは瞠目すべきものである一方、古来の「太鼓」との明らかな一線もまた考慮されるべきではないかといった意見から、「日本画」「和服」などに見られる文化的ラベリングの是非にまで議論は及んだ。錚々たる専門家の面々が目を輝かせ討論の言葉を紡ぎ出すという状況を生み出した山部氏の「和太鼓」は、この「創造する伝統賞」、さらに掘り進めば伝統とは何かといった問題提起ともなる次代性を持つものであると言わざるを得ない。（池内 務）